



日本銃砲史学会 ニュースレター

第8号

● 第418回 第424回日本銃砲史学会例会開催

2023年3月11日、早稲田大学各務記念材料技術研究所で、第424回日本銃砲史学会の第424回例会が開かれました。

例会では、会員の山本隆志さんによる「明治期以降の

火縄銃」、同じく会員の新名純一郎さんによる「ブレンワルド日記にみる幕府と武器交渉について」、理事の栗原洋一さんによる「銃砲・火薬からみた幕末維新」の発表がありました。

● 戦跡見学会が行われる

2023年3月21日、千葉県成田市にある千葉県房総

のむらにある戦車掩体壕を日本銃砲史学会会員の皆さんなど計17人で見学しました。

● 第46回古武道演武大会で、理事の青木さん、市川さんらが演武を披露

2023年2月5日、東京都千代田区の日本武道館で第44回古武道演武大会が開催されました。

この大会は、日本各地で活動している古武道の流派が演武を披露するもので、今回は数ある中から厳選された35流派が参加。この大会の最後を飾ったのが、日本銃砲史学会理事の青木孝さんが代表を務める森重流砲術です。会員の市川恵一さんらとともに、森重流砲術の演武を披露しました



演武を披露する森重流砲術の皆さん

● 会員の皆さんが出版された本のご案内 ● 日本銃砲史学会事務局

● 『幕末の大砲、海を渡る』郡司健さん

会員の郡司健さんが『幕末の大砲、海を渡る』を鳥影社より上梓されました。定価は税込み2420円(+送料)ですが、銃砲史学会の会員の皆様には特別価格(送料込み2000円)で販売して下さるそうです。後日、会誌発送時に購入申込書を同封いたしますので、必要事項を記入の上、事務局へお送りください。尚、本の発送と郵便振込用紙をお送りしますので、銃砲史学会へ入金をお願いします。但し、会員のみ1人1冊となります。

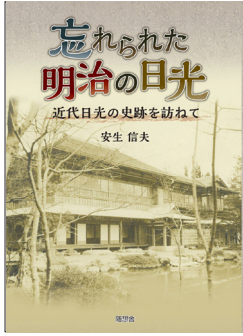


● 『日本の大砲とその歴史』中江秀雄さん

会員である中江秀雄さんが『日本の大砲とその歴史』を雄山閣出版から出版され、昨年の12月例会時に紹介がありました。定価は3080円です。全国の書店、ネット通販各社、雄山閣出版のサイトのほか直接、中江さんにお申込みされても購入可能です。



●『忘れられた明治の日光』 安生信夫さん



当会の会員である安生信夫さんが自費出版した『忘れられた明治の日光 近代日光の史跡を訪ねて』（2018年 随想舎刊 定価1800円）を紹介します。

足尾銅山の見学ツアーに参加しようとして、たまたま図書館で見つけた本です。浩養園、旧日光市華族の別邸、日光橋、足尾銅山鉄索などについて書かれています。

銃砲に関する本ではありませんが、近代日本の歴史に興味がある方は一読されることをお勧めします。

尚、全国の書店、ネット通販各社で購入することができますが、下記の住所へ連絡頂ければ、送料込み 1500 円で

郵送して下さるそうです。
(連絡先)

(報告 栗原洋一)

〒321-1414 栃木県日光市萩垣面 2440-39

安生信夫

●『田中久重と技術の継承』 河本信雄さん

会員の河本信雄さんが『田中久重と技術の継承 時計からからくり人形、そして電信機』を思文閣出版から佛教大学研究叢書の1冊として上梓されました。河本さんが長年にわたって研究している東芝の創始者田中久重に関する本です。税込み 8360 円で、全国の書店、ネット通販各社で購入することができます。



●アメリカ空軍古銃愛好家 サミュエル・ビーチ氏が葦北鉄砲隊を訪問

私の住んでいる熊本県人吉市は旧相良藩の城下町です。ここから不知火海の海沿いの1番近いところに葦北町があります。この葦北町には佐敷城がありました。ここには1634年頃から葦北鉄砲隊（葦北御郡筒）があったとのこと。

そのいにしえを元に2003年、平江大八隊長を中心に葦北鉄砲隊が発足しました。2014年9月には鉄砲隊創設10周年を記念して「全国火縄銃サミット」を開催、251名の一斉射撃演武はギネス記録にも登録されています。その時のこの全国大会には私も見学させて頂きました。

2022年3月25日、この葦北鉄砲隊の地を沖縄米空軍駐留の火縄銃研究家でアメリカ人のビーチ氏が訪問しました。平江大八隊長と歓談、翌26日には葦北鉄砲隊隊員3名と共に佐敷城跡の二ノ丸にて鉄砲の演武を具体的に披露して歓待しました。以下にTKUテレビくまもとのニュース記事を紹介いたします。

「火縄銃を研究するアメリカ人



△演武の後で写真中央がビーチ氏、左から2番目が平江隊長

△葦北鉄砲隊の展示コーナー

が3月26日に芦北町を訪れ、葦北鉄砲隊による砲術訓練を見学しました。見学したのは沖縄の嘉手納基地に所属するアメリカ空軍上級空兵、サミュエル・ビーチさんで、この日は火縄銃3丁を使った訓練が披露されました。ビーチさんは「素晴らしい体験だった。帰国したら自分たちの鉄砲隊をつくりたい」と話していました。」(動画はTKU テレビくまもとニュースで見れるかと思えます)

また翌々に同氏は、地元の葦北町総合コミュニティ

センター内の葦北鉄砲隊コーナーを訪問し、展示の肥後筒の紹介や分解方法を披露されたとのこと。ビーチ氏はインディアナ州出身で日本の火縄銃に詳しく、会場では火縄銃談義に花が咲いたとのこと。

葦北鉄砲隊は葦北御郡筒と称して稲富流の砲術を伝承しています。葦北鉄砲隊の鉄砲等の展示場所は熊本県芦北町大字花岡1647番地、芦北町総合コミュニティセンターの2階です。

(報告 熊本県人吉市 松本晋一)

●鉄砲洲稲荷神社を訪ねて

2020年8月、東京都中央区八丁堀にある全国火薬類保安協会に出かける機会があり、近くにある鉄砲洲稲荷



図1：砲洲稲荷橋湊神社
(国立国会図書館蔵)

神社(写真1)を訪ねました。地下鉄日比谷線八丁堀駅から歩いて5分位のところにあ

ります。歌川広重の江戸名所図会(図1)にも描かれていて、境内には力石や富士塚が残されています。鉄砲洲の地名の由来は、①寛永の頃、幕府鉄砲方の井上・稲富の両家が、この砂州上で大筒の稽古を行っていた。②徳川家康が入府の時、京橋川が墨田川に合流する細長い洲が「鉄砲洲」と呼ばれており、砂州の形が鉄砲に似ている。の2説あります。どちらの説が正しいかはっきりしませんが、おそらく江戸幕府の初期の頃にはこの辺りで大筒の稽古が行われていたようです。その後、この鉄砲洲の地が江戸城に近いことから、大筒の稽古場は鎌倉の由比が浜に移されています。

(報告 栗原洋一)



写真1：鉄砲洲稲荷神社(現在)

●明治日本の産業革命遺産を見学して

先日、東京都新宿区の総務省第2庁舎別館にある産業遺産情報センターで開催中の「明治日本の産業革命遺産」を見学してきました。

内容は、導入展示で幕末明治の長崎、江戸湾防衛に始まり、幕末の薩摩藩、佐賀藩、長州藩の反射炉などについて展示され、メイン展示では造船、製鉄、製鋼、石炭産業について解説されています。特に、マスコミで話題になった軍艦島についての展示コーナーもありました。銃砲関係では、各藩で鑄鉄製大砲の製造に挑んだ様子が詳しく展示されています。ご興味のある方はインター

ネットにて事前に予約し申し込みれば無料で見学できます。

(報告 栗原洋一)

●上福岡歴史民俗資料館を見学して

2020年の春、行く予定であったがコロナの関係で出かけられなかった埼玉県ふじみ野市の上福岡歴史民俗資料館を、2021年11月に見学してきました。

ふじみ野市役所上福岡歴史民俗資料館は、東武東上線上福岡駅から歩いて約20分のところにあります。現在ふじみ野市に合併してしまいましたが、旧上福岡市の中央部には、戦前、陸軍造兵廠川越製造所(火工廠)がありまし



火工廠 (写真)

た。ここは陸軍の弾薬工場でした。陸軍造兵廠川越製造所では各種火薬類製造の他、航空機用機関砲、機関銃の弾丸組立てと爆弾などの製造加工がおこなわれていました。

歴史民俗資料館の入口正面に火工廠の展示解説ブースがあり、当時の工場模型や弾薬類、陶製手榴弾や地雷の容器などが展示されていました。入手した資料によれば、火工廠は1936年に着工し、1937年火具製造所となり、1940年には第3製造所、1942年川越製造所となって終戦を迎えたと書かれています。また、2021年4月にふじみ野市役所にて火工廠の展示があり、「火工廠物語」本を



弾薬類(回収品)



陶製手榴弾(容器)

購入しました。

その中に、当時、製造していた火薬類は雷汞、窒化鉛などの起爆薬や雷管、信管と、信号弾、焼夷弾、特殊弾などが書かれていました。戦前の火工品などに興味のある方は見学することをお勧めします。(報告 栗原洋一)

●高校生が「古土法」による硝石づくりに挑戦

硝石の採れない我が国では、戦国時代の終わりから、明治のはじめまで約300年間にわたり、多くの藩で民家の床下土から煙硝をとる「古土法」が行われていました。埼玉県立熊谷西高校は国のSSH(Super Science High School)の指定を受けている進学校で、研究の一つに「江戸期の硝



大窯での濃縮作業(筆者宅の庭)



寒い中での抽出作業(筆者宅の庭)

石づくり」を掲げ、筆者にその指導の依頼がありました。

2020年12月12日には筆者宅(埼玉県秩父郡長瀬町)の庭で理数科生徒代表9人が、実習に使う寺の床下土や木灰の成分抽出、さらに大窯を用いた抽出水の濃縮作業を行いました。その後、3日間にわたり、熊谷西高校(理数科生徒44人)で講義と実験及びSGD(Small Group Discussion)を展開しました。生成した硝石を使った燃焼実験、西欧との比較や硝化細菌による生成の理論の学習を通して、生徒たちは工夫され受け継がれてきた硝石づくりに驚嘆していました。今は床下土の採取も大

変ですが、貴重な歴史的科学技術の体験実習を実現させることができました。

(日本薬科大学 客員教授 野澤直美)

日本銃砲史学会ニュースレター 第8号
2023年4月30日発行
日本銃砲史学会 事務局

発行人 栗原洋一

編集担当 加唐亜紀